

元島民が語る「北方領土」 —高橋節子さん・小濱暁子さん—その①

都内に住む高橋節子さん（昭和2（1927）年生まれ）と妹の小濱暁子さん（昭和12（1937）年生まれ）は、択捉島の紗那に生まれ育ちました。



▲ 兄妹の集合写真 右上 節子さん 15歳
昭和17（1942）年 右下 暁子さん 5歳

終戦の報とソ連軍の上陸

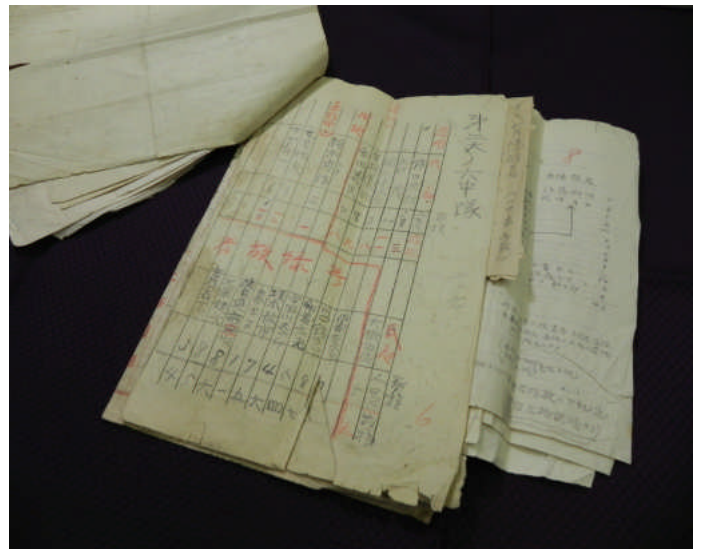
私たち姉妹は、両親と6人兄弟で択捉島の紗那村に暮らしていました。私（節子）は東京の学校にいましたが、兄の病死のため、昭和20（1945）年7月半ばに紗那村に帰省しました。その後、終戦の知らせを聞き東京の学校に戻れると思いましたが、終戦と同時に本土との音信がすべてとだえてしまいました。

ソ連兵が最初に来た時、戦争が終わったのに何のためにソ連軍が入ってきたのか？それが疑問でした。また、靴のまま入ってくるソビエト兵に対して私は抗議しましたが、向こうはお構いなしでした。自分の心を踏みにじられたという思いでいっぱいでした。

ソ連軍による占領と強制労働

ソ連軍が来てからは、夜は天井裏の隠し部屋で息を潜めて生活していました。朝起きるとタンスの着物や家財道具がひっくり返されているということがよくありました。ソ連兵に着物や食器、貴金属など金めの物は根こそぎ奪われ、お骨まで開けられて、想像を絶する状況でした。当時私たちは、ソ連兵のことを“海賊”と呼んでいました。

まもなくソビエト化と称し、みんな芋掘りや木の切り出しといった強制労働に従事させられました。その後、私はソ連の民生局の事務員として、強制労働に従事している人々や引揚者の名簿作りなどの労働をしました。



▲ 引揚者名簿

択捉島からの引き揚げ

昭和22（1947）年9月、引揚船で樺太經由、函館に上陸しました。父は択捉島でソ連軍相手に商売をし、私は学費のためにお金を貯めていましたが、樺太でわずかなお金を残してすべて取り上げられてしまいました。

樺太では、真岡の学校の庭に、雨露をしのぐ程度の仮設小屋が建てられ宿舎となっていました。そこではどろどろした雑炊が配給されましたが、私は食べられませんでした。暑さもあって亡くなった人がいたり、父も荷物が重くて体調を悪くしたために荷物を捨ててしまったりもしました。